

---

# - 共に生きて -

通りすがりの暇人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

- 共に生きて -

### 【Nコード】

N0617BA

### 【作者名】

通りすがりの暇人

### 【あらすじ】

「その日、ハチャメチャな朝を迎えたおれは“偶然”にも、一人の少女と出会うことになる。

それが、アドリビトムと言うギルドでの騒がしくも楽しく、慌ただしくも充実した日々の始まりになったんだ

「  
テイルズ・オブ・ザ・ワールド レディアント・マイソロジー3の世界を、オリジナル主人公の視点で描く二次小説です。」

・ P r o l o g u e ・

.....

.....

...

「（　　く、る……しい……）」

大量の空気の泡に囲まれた海の中、声になってない声で、そう呟いた。

季節は冬。寒さを凌ぐ為に服を重ねて着ていたのが仇になったらしい。

暗い海に放り投げられた瞬間、服は海水を吸った事で、温かい着衣から自らを戒める重い枷へと、その役割を変える。

周りにあつた気泡が収まるよりも早く、必死に手足を動かしてこの冷たい世界から逃れようとしたけれど、ゴールは近いように見えて、果てしなく遠かった。

自身を戒める重い枷と化してしまつた服と、肌を刺すような冷たい水が動きを鈍らせる。それらが生んだ焦りが肺に残っていた僅かな酸素すらも容赦なく奪い、代わりに氷のように冷たい海水が否応なしに入り込んでいく。

「（……にな……）」

意識が遠のいていく感覚。それに寸分の違いも無い。必死にもがいていた手足も、やがて動きが止まつた。

「（……た……ない……）」

抵抗を失つた体はゆっくりと海中に沈み続けていくのみ。残っていた力を振り絞って伸ばした右手も、虚しく海水を掴むだけに終わった。

「（…死に…、ない…っ）」

指先の感覚も、もう無い。周りも徐々に光の届かない暗闇へと変貌していく。

「（ … 死にたく、ない…！）」

それでも……それでも、そう強く思った瞬間だった。霞んでいく視界の中に“それ”は現れた。

“ 赤い煙 ”

深く、暗くて、何もなく、ただひたすら冷たい海の中。そう形容するしかないものが、そこにあった。

『、。』

その“赤い煙”はまるで観察するように自分の周囲をゆっくりと回っていたが、再び目の前に来た所でそれは止まった。

それが何を思っで行動しているのかは分からないけれど、自分はそのれを知る事はきつと叶わない。意識はもう、限界だったから。

……けれど、意識が途切れる瞬間。僅かだけ見えた。それは“赤い煙”が自分の体を包み込んでいく様子。

感覚のなくなった指や足、その全てを“赤い煙”は包み込み、そし  
て……

…

…

…

ぴちゅ

「……………つ、……………」

ふと、頬に生暖かい何かが落ちてきて意識が夢の中から引っ張り出された。

心地いい微睡みを邪魔するその感触に、思わず眉間に皺が寄りながらも、それが一体なんなのかを確かめる為に頬に触れる。

「水……………」

頬にあった感触は、無意識に呟いたものと殆ど同じだった。

でも、水にしては粘り気があるような何というか、……………つか、今気づいたんだけど何か匂うぞ、これ？

そこでようやく重い瞼を開けて　　あー、なるほど。と、寝起き  
の頭がようやく答えを理解した。



現在の状況、なんか大量のウルフの群れが、無防備に寝ていた自分の顔を覗き込んでいます。

うし、大事な事だからもう一度言おうか。

現在の状況、なんか大量のウルフの群れが、無防備に寝ていた自分の顔を覗き込んでいます。

……いやいやいやいや。比喻でも冗談でも無いんですって。本気と書いてマジなんですよ、これが。

黒と灰色の毛並み。そして首を覆う白いフサフサな毛が特徴的な、やけに足の速い四足歩行の獣型の魔物が目の前にいた。しかも群れで囲んでいらっしやってやがる。

どうも頬に落ちたのは、一番近く……つか、目の前にいる奴の涎だったらしい。

顔を近づけてこちらを見てるソイツのヤケにでかい瞳には、おれの姿が映って見えた。

長い旅により擦り切れた服、青みがかった黒い短髪、そして翠の目が特徴的な自分の顔は、この状況に対して何とも微妙な表情になっている。

しかし、まあ、アレだ。

こんな獣共の群れが、不用心に寝入っていた自分の顔を一斉に見ていると言うのは、冗談なしにめっちゃくちゃシユールだと思う。

いつそ笑えばいいのか？

もしくは夢だと断じて寝直せばいいのか？

はたまた羊や、三匹の子豚や、赤い頭巾の少女の気持ちになりきれ  
ばいいのか？

そんなアホ過ぎる疑問は多分、目の前の涎を垂らしたウルフが答えて  
くれるだろう。……言葉じゃなく、そのキラツギラに輝いてる牙  
で。

そう言った感じで現実逃避していると、顔を覗き込んでいたウルフ  
が、『野郎どもー！ 久々のごちそうだー！』って言わんばかりに  
空に高らかに吠えた。

そして、ギラギラに光る牙をおれの喉元へ突き刺ささんとし

って、のん気に解説してる場合じゃねえええええええええええ  
えええええええええええええええええッ！！

「うああああああッ！？」

あまりの状況からか、それとも生存本能が働いたからか、ともかく  
眠気が一瞬でふっ飛んだおれは慌てて顔を逸らし、喉への噛みつき  
攻撃を間一髪で回避する。

枕代わりにしていた木の根っこが噛み砕かれてる所を見るに、友愛  
的な意味での甘噛みじゃないのは明らかだった。

避けてなかったら、本気でシャレにならない事になっていたのは言うまでもないと思う。

で、回避ついでに近くにあった旅荷物を回収。ウルフ共の包囲網から一目散に逃げ出す。

……ええ、逃げますとも！ 本気で逃げますとも！！ 逃げるしかないだろこの状況ツ！？

「ちよ、待て待て待て！！ 一体なんなんだよこれ！？ なんで朝っぱらからいきなり命の危機に直面してんだよ ツ！！！！」

半ばパニック状態となり叫び声を上げる。

当然のごとく、こんな人気のない森の中で、おれのそんな叫びなんて聞くヒトなんていない訳なので、親切な説明などもあるはずがない。

そして血気盛んなウルフとその群れにも、おれの叫びが届くはずもない。狩人（ウルフ共）はただ、目の色を変えて獲物おれをひたすら追ってくるのみ。

負けたらDead Endが事実となるウルフ主催の死の鬼ごっこが、今ここに開催された。



ボロボロな外套を纏うその存在は、ゆっくりと体を起こすと辺りを見渡すように首を左右に動かす。

けれど周りにはあるのは深々と生い茂る草木だけ。木々はどれもかなり背が高く、そこから伸びた多くの青葉が空から照らす日差しを隠しており、それが薄暗い印象に拍車を掛ける。

それが、どうしようもないほどの不安をその存在に与えた。

「……………こじは、どじ……………」

俯きながら、ぽつりと誰に聞く訳でもなく、まるで鈴の音色のような声が紡がれる。

「ボクは……………、だれ……………」

風がどこからか吹き付ける。不安に染まった音色が、風と共に溶けて消えて行った

- Prologue - (後書き)

どうも、今回思い切ってマイソロ3の二次小説を書く事にしました、通りすがりの暇人と申します。

初めて投稿する物ですのでまだ拙い部分もあります。

感想やアドバイスに、誤字脱字に文章の構成についての指摘とかありましたら是非ともお願いします。

## 偶然の出会い／始まり

ふと、空を見上げてみると生い茂る木々があり、その向こうには雲一つない青空が広がっていた。

薄暗い森の中、木漏れ日として降る光はこの季節だと暖かく感じ、例え引きこもりの人間でも、きつと家の中にいるのがバカバカしく思うほどだ。

つまりはいい天気なのだ。ああ、それはもういい天気だ。いい天気すぎる。

洗濯物とか干したらきつとすぐ乾いて、ふわふわとした仕上がりになり、日の暖かな匂いがもれなく付いてくるに違いない。

……さて、そんな気持ちのいい天気の下、語り手な感じになってるおれが何をしているかと問われれば、間違いなく、一言で、こう答えるだろう。

全・力・疾・走　と。







『…………え?』

思わず口から出た疑問の声。しかし、それはおれ一人だけの物じゃなかった。

それが何かを考える前に、直感が頭の中で警鐘を鳴らす。

その警鐘が何を意味しているのかまで思考が回らなかったのは、きっと今まで生きてきた中でも五指に入る不覚だと思っ。

「あ、これはヤバイ」　そう言葉にするよりも早く、結果が先にやってくる。

ゴッンッ

その瞬間、視界いっぱいを埋め尽くした茶色とおれが勢い良く衝突し、鈍い痛みが鼻を中心に広がった。

「あだっ!?!」

「みゃうツ!?!」

思わず出る悲鳴……いや、ちょ、ほ、星イ!?! なんか一瞬で視界が、星で埋め尽されたスター!! つか「みゃうツ!?!」って、ちよつと小動物っぽい悲鳴を上げたのは一体どこのどなた!?!

鈍い痛みと視界いっぱい広がった星のせいで、語尾がカオスになり思考が纏まらず混乱の極みに陥る。いや、マジで鼻痛い。

そのせいか、頭の中で鳴り響く警鐘が収まってないことにも気づかなかった。不覚がまた一つ追加されたのは言うまでもない。

『厄日はまだ続くんだZE?』と、おれ自身を嘲笑うかのように鳴り響いていたそれに改めて気づいた時には、もう事は動き始めた。た。

ピシ……ッ

鈍い痛みからようやく回復した思考が最初に認識したのは、嫌な予感しか感じさせない、そんな足下からの音であった。

「は？」と、視線を足下へ向ける。そこにあつたのは自分の左足。さつき茶色の何かと衝突した際、無意識ながらも踏みとどまって尻餅を付くのを免れた証拠だった。

その踏みしめた地面に、何故か蜘蛛の巣のような“ひび”が現在進行形で広がっていた。それもかなりの速度で。

……察するに、どうやら自分がいるのは、かなり薄い岩の上だったらしい。

その“ひび”が、冷や汗を滝のように流すおれを中心に広がっていき、そして前方で呻いていた茶色の所まで来た所で限界に達したのか、『バキィッ!』と言う音と共に体が宙に浮いた。

いや違う。宙に浮いたんじゃない、これは、まさしく、落ちて、いやがる　っ!

「う、おっ……なああああああああああああ!?!?」

「え、あっ……きゃあああああああああああ!?!?」

なんか被ったっ!?　なんか、悲鳴が被ってるんですけど!?!?

混乱の極みに陥った脳の片隅でツッコミながらも、現状を把握しようとするが……立て続けに来た異常のせいトランプルで思考が上手く働かなく

なっている。

鳥でもないおれ（＋）は悲鳴を上げながら、ただ落ちるだけ。悲しきかな、重力には逆らえないのがヒトの性だ。

「不幸だあああああああああああつっ！！！！」

どこぞのイマジンでブレイカーなツンツン頭の口癖を叫ぶ。電波が飛んできたと言われれば正にその通りである。

その電波を叫んで落下が止まる訳ではなかったが、それでも叫ばすにはいられなかった。ヤケクソなのは言わずもがな。

そんなおれ（＋）に、安全地帯に避難していたウルフの群れが憐憫の籠もった眼差しを向けていたが、そこまでツツコミを入れられるほどの余裕なんて無かったことも言わずもがな。

「今日は本気で厄日かよ、コンチクシヨウが……！」

手足を大の字に広げ、桃太郎の桃よろしく川の流れにどんぶらこ身を任せて、誰に聴かせる訳でもなく悪態をついた。

若干、口調がやさぐれてるように感じるのは、今まで起きたことを鑑みれば無理がないと思う。

例え厄日だとしても限度は是非とも考えるべきだ。それも早急に。コンマ一秒、いや光より速く　出来るかバカヤロウ。

#### 閑話休題

不幸中の幸いは、落下先が結構深くて流れも穏やかな川であったことと、旅荷物をつい先日耐水性に変えており中身がずぶ濡れになるのを免れたことか。

因みに、落下の衝撃　擬音は豪快にもザッパーン！だった  
で中身（主に食料）がどうなってるかなんて今は考えない。  
考えても楽しくないことになるのは目に見えてるからな。

ヒトは、それを現実逃避と言うが気にはいけない。ついでなんでも服がびしょ濡れなのも気にしないことにしよう。ウルフの腹の中に収まるのと引き換えだと思えば破格の安さだ。

「……いや、まあ、荷物や服はまだ良いか。なんか一緒に流れてる色とりどりの花も気になるけど、今一番気にしなきゃならないのは、やっぱり“アレ”だよな？」

視線を右へと向ける。

そこには自分と同じように桃太郎の桃よろしく、どんぶらこ、どんぶらこ、と浮かんでる件の茶色がいた。

よく見れば、それは人一人が丸ごと収まるくらいに大きい外套であった。なら、自分と直撃したのは中身のヒトなんだろう。

「なあ、その茶色の。生きてるか？」

「……」

へんじがない　ただの　しかばね　のようだ

……戯れ言は置いていて、と。

外套のせいで未だに顔は見えないが、呼んでもうんともすんとも言わない所と気配などを鑑みるに、中のヒトは気絶してるんだろう。放っておいたら溺れることは間違いない。



流石にそれはこちらの寝覚めが悪くなるので、引き寄せてから近くに あった浅瀬へ向かう。

服や髪に吸い付いた水を鬱陶しく思いながら茶色を抱えて川から上がる。俗にお姫様だつこと言われるものだが、今はどうでもいいことだ。

取りあえず改めて辺りを見回す。視界に移ったのは少し青っぽい岩や緑の苔などであり、ここが洞窟の中であるとすぐに分かった。

ただ、天井は所々に穴が空いており、そこから外の日の光が入り込んでるせいで暗くはなく、寧ろ明るい。先ほど自分達が落ちた穴もその一つに加わっている。

それらを一通り見た後、自分と一緒に流れていた色とりどりの花を思い出した所で、この洞窟の名前にすぐに思い至った。

「……………ここ、『シフノ湧泉洞』だよな。不幸中の幸いが一つ追加かな？」

すぐに分かったのは極めて簡単な理由だった。 おれの目的地 だったのだ。この場所は。

より正確に言えば、用があるのは此処の入り口辺りにいるはずの待ち人 なんだけど、後で探さないとダメか。

だとすると、一緒に川に流れていた色とりどりの花は、ここどこかに生えてる『ユルングの樹』と呼ばれる大樹から落ちた物のはず

だ。近場の町で聞いた通りだから間違いないはず。……雌しべか雄しべか、どっちが落ちるかまでは覚えてないけど。

って待て待て。と言うとアレか？ おれはウルフに追われる内に目的地の真上に知らず来てたって言うのか？

うわぁ、なにそれ、すっげー微妙な気分……と、そこで思考を断ち切った。今はとりあえず茶色の介抱をするべきだろう。

適当な場所に茶色を寝かし、何気なく頭に当たる部分の外套を外した所で、

“ドクンッ”

いきなり大きく心臓が跳ねた。

「え？」

呟いた疑問の声が遅れて聞こえた気がした。

その視線の先、茶色の外套から現れたのは、華奢な印象の可愛らしい女の子だった。

顔立ちはまだ幼さを残しており、肩まで伸びたその髪は、銀色の中に鮮やかな朱が自然に混じり合った神秘的な色をしている。

雪のような白銀と、夕焼けのような朱が、お互いに自己主張しながらも認め合い、自然と溶け合ってる感じだった。

そんな女の子の顔を見た瞬間、心臓が跳ねて動きが止まった。

一目惚れ……なんて、ベタなものをした訳ではない。だいたい、それで動きが止まるほどでも無いだろう。そもそも、この動悸はそんなものじゃない……！

“ドクンッ”

「　　っ！？　　が……！！」

再び心臓が跳ねて、思わず胸を押さえる。だが動悸は止まらず更に激しくなっていく。

“ドクンッ”

三度目。息は苦しく、指先から体の芯まで感覚が無くなっていく。

『怖い』と言う思いが、『恐怖』と言う感情が、心の中で際限なく  
暴れ出す。制御なんて効かない。

視界が狭まり、意識そのものが白く染まり、消えようとしたその寸  
前

「ん、う……！」

少女の口から漏れた呻きに近い声で、ハッと意識が戻った。

いつの間にか鼓動も元に戻っている。いや、それだけじゃない、息  
苦しさも感覚が無くなった感じも、得体の知れない恐怖も、その全  
てが“なにもなかった”かのように消えていた。

「っ、今のは、一体……!?!?」

もう一度女の子の顔を見るが、自分にはなんの変化もない。もしかしたら関係ないのか？

幻覚、にしてはリアル過ぎる。感覚もハッキリ覚えているのだが、今はそんな異常は全然感じられない。

なんで。なぜ。なにが。と、次々に頭の中に浮かぶ疑問の声。しかし、それらに合う答えは残念ながら持ちあわせていない。

「う、あ……っ」

ループに入りかけた思考は、再び聞こえた女の子の呻き声により引きずり戻された。

……今はこつちを優先した方がいいだろう。

どちらにしる、さっきの動悸の原因が分からないんだ。分からないなら今は置いておくしかない。と、意識を切り換える。

「おい、大丈夫か？ 意識があるなら返事しろ」

「……っ、う」

取りあえず女の子を軽く揺すりながら呼びかける。寝かしといた方が良い気もするが、びしょ濡れのままは流石にマズい。

だからと言って勝手に服を剥ぎ取るのはもっとマズいし色々ダメだろう。相手が自分と歳の近い女の子ならなおさらだ。……そこ、ヘタレとか言わないように。

そんな感じで呼び続けるも、一度目、二度目、三度目までは呻くだけにとどまったが

「……あ」

四度目の呼びかけで、閉じていた瞼がゆっくりと開かれた。……ようやく気がついたみたいだ。

開かれた瞼の奥にあったのは、澄み切った紅い色の瞳だった。

燃え上がる炎でも、熱い血とも全然違う。例えるなら紅玉のような、綺麗としか言いようがない“紅”がそこにあった。

容姿や髪の色も合わさって、神秘的な雰囲気がいよいよ強くなったのは気のせいじゃないだろう。

「……キミは……、だれ……？」

女の子はその紅い瞳でまっすぐにおれを捉えると、どこか辿々しく消え入りそうな声で言葉を紡ぐ。

と言いますか、その質問はおれの方が聞きたかったんだけど……答えないのもアレだと思つので応じはするが。

「おれはさっき上でお前とぶつかった奴だよ。名前はアキト、アキト・セレーナだ」

「……もしかして、すごい勢いで走ってきたヒト……？」

「あー、うん。その認識でいたい合ってるな。……つか、そんなに凄い勢いで走ってたか？」

おれの問いに女の子は「ん」と速攻で頷く。

いや、確かにウルフの群れを相手に普通に逃げ続けてるなんて所行は、端から見ると凄い勢で走ってるように見えるか。

おれはそれが普通だから気づかなかったけど。

兎にも角にも、だ。

「悪かったな。おれの不注意のせいでこんな目に合わせちゃって」

「……ううん、ボクはだいじょうぶ。それに、謝るならボクも同じだから」

女の子は体を起こし、鈴の音色のような声で言葉を紡ぐ。しかし、おれは思わず首を傾げた。

身内の約一名ならともかく、この子に謝られることなど無いと思うのだけど。

「なんでお前が謝るんさ？」

「キミとぶつかったこと。ボク、あの時ぼんやりしてて、キミに気づかなかったから」

「……それ、お前が謝る必要はないだろ。あれはおれの方が全面的に悪いし」

もともと、おれがウルフの縄張りで呑気にグースカ寝てたことが原因だしな。と、出来立てホヤホヤのトラウマなどを思い出す。トラウマだけはすぐに脳の片隅に追いやるが。

それに、あの地面が薄い岩だったて知らなかったとしても、川に落ちる原因になったのは間違いなく自分だろう。

「頭下げて謝るのはゴタゴタに巻き込みしまったおれの方だ。……本当に悪かった」



そう言つて頭を下げる。ホント、色々と反省しなければならぬ。自分一人だけならともかく、関係ない者まで巻き込んだんだ。反省は必須だし、謝罪は必然だ。

だが、何故か女の子の方は少し慌てた様子で、

「あ、頭あげて……？ その、ボクはぜんぜん、だいじょうぶだから。ボクも悪かったし」

と言う。……なんとなく、せわしく慌てるその様子は小動物をイメージさせて、少しだけ心が和み じゃなくて、ちよつと待て。

「いや、だからさ、どう考えてもお前が悪い所なんてないだろ。あれは完全におれの不注意だ」

「でも、それだとキミの負担が大きいから」

「負担が大きいからとか関係ないだろうが。 ほんぐらいのことはしたと思ってるし」

「だめ。アレはボクも悪かったもんっ」

「意地の張り方がなんかおかしくね？ 普通は逆の方向に意地を張るんじゃないんですかね!？」

「この『じょうもの』っ!」



女の子はおれの言葉に笑うのを一端止めて首を傾げる。話は聞いてくれるみたいだ。

「要は痛み分けだ。おれもお前も、どっちも『自分が悪い』って譲らないからケンカしちまったんだ。だったら『どっちも悪い』ってことで終わりしねえか？」

「……………いいの？ キミの負担が大きくないかな」

「ばーか。こんなことに負担とかそもそもねえよ。つか、お前がそう言ってくれるだけで有り難い」

そう言ってから、女の子の頭に手を置いて撫でる。子ども扱いな気もするが、なんとなくやりたくなかったのだ。

女の子の方も、手を置いた時はビクツと驚いていたが、撫でられると分かると安心したように目を細めた。…………マジで小動物っぽいんですが。

「じゃあこの話は終わりな。で、いい加減に服をなんとかしねえと……………流石に風邪引く」

「……………ん」

頷いた女の子の頭から手を離し、自分の旅荷物の方へ向かう。今の今まで忘れていたが、おれたちは未だにびしょ濡れである。

取りあえず、旅荷物の中を見て……お、意外に中身無事だ。ここに来る前に作った改心の出来のカツサンドも形が整ったままだ。火付け道具も湿ってない。

思わぬ幸運にテンションが高くなりつつ、火を付ける為に周りに入った、地上から流れついた物であろう枯れ木を拾っていく。

「あ、ボクも手伝う」

「ああ、悪いな　　って」

少し遠くにあった枯れ木を拾いに行く女の子に対して、礼を言おうとして、ようやく気がついた。

しまった。そう言えば、この少女の名前を全く聞いてなかったことをすっかり忘れていた。

自分は最初に名乗っていたが……仕方ない、ちょうど良いから今聞いておくか。

こちらに背を向けて枯れ木を拾い続ける女の子に呼びかける。

「なあ、すっかり忘れてたんだけどさ、お前の名前を覚えてくれねえか？ ほら、いい加減に『お前』呼びはとか良くねえし」

「……………っ！」

その何気ない問いに、未だ名も知らない女の子は背中を震わせて動きを止めた。……………どうした？

「……………分からないの」

背を向けたまま紡がれた言葉に、おれは理解が追いつかなかった。

そんなおれに向けてか、それとも自身に向けてか、女の子は言葉を続ける。その声色に、さつきケンカしてた時とは違う言い知れない暗さを伴ったまま。

「気がついたら、森の中でひとりで、なんでそこにいたのかとか、……………自分の名前も、分からなかったの」

その独白に、思わず言葉を失う。

嘘では無いのは様子を見れば分かった。この短い時間の間で、この子がそんな質の悪い冗談を言うはずがないと分かったからだ。

つまり、この女の子は

「記憶、喪失……!？」

女の子はなにも言い返さない。

いや言い返す必要がないだろう。おれが言ったことに違いはないのだから。

「……あの、アキトさん、でいいのかな？」

暫くして無言で女の子は振り返る。顔以外を茶色の外套で覆ったその少女は無表情で、おれには悲痛としか言えない面持ちでそう聞く。

「……アキトでいい」

「ん。じゃあ、アキト。……アキトは分かる？」

ボクが、だれなのか」

……おれは、その問いに答えることが出来なかった。

そりゃそうだ。そんなの分かる訳がない。名前を聞いたのはおれの

方なのだから。

女の子もそれが分かっているんだろう。だから慌てて首を振った。

「あ、ご、ごめん！ 変なこと聞いて。こんなこと、アキトに言っても困るだけだよな？」

「いや、んなことは」

ない。と言おうとして、動きが止まる。

困ったのは事実だったし、嘘を言ったとしても、逆に傷つけるんじゃないのか？

そんな疑問が頭をよぎって、それでもなにか言おうとして……その瞬間、全身に悪寒が走った。

ヤバイ。

「っ！？」

「……あれ、アキト？ どうしたの わぁっ！？」

頭の中に鳴り響く警鐘を理解し、とっさに女の子の所まで跳ぶように駆けて、抱き締めるように抱えてから、その場を一気に離れて、物影へと飛び込む。

直後、女の子がついさつきまでいた場所に、おれの背丈くらいある巨大な炎の塊が墜ち　　爆発した。

《ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！！！》と言う爆音が耳に響き、灼熱を纏った爆風がおれ達に襲いかかる。

「ぐうっ……！？」

「あ、アキト！？」

幸い、この子を下にする形で庇っていたが、衝撃は凄まじく呻き声が自然と出る。……悪寒に従って離れて良かった。

「アキト！　アキトっ！　だいじょうぶ！？　怪我とかしてない！？」



「なんとかな。つか、今は一体……!？」

涙目でこちらを心配する女の子を宥めつつも体を起こして、視線を先ほど炎の塊が墮ちた所へと向ける。

そこは散々なことになっていた。

洞窟ゆえに足下は岩だったのだが、それがあまりの熱量に溶けて熔岩のようになっていた。

まともに直撃したら、骨も残らず焼き尽くされていたのは、間違いないだろう。

バサアッ

あまりの状況に呆然としかけていたおれ達の耳に、ふと羽ばたくような音が聞こえてきた。

視線をその音が聞こえた方　頭上へと向け、そこで動きが止まりかけた。

そこにいたのは、背後に赤い魔法陣を展開し終えた一人の女性だった。

女性は、荘厳な装飾が施された白の鎧を身に纏い、右手には錨のよ

うな形をした大剣を、左手には先端に刃が付けられた盾を装備している。

青い髪に肌は浅黒く、顔立ちが美人と言えるものだったが、その視線はあまりにも冷たい。まるで機械のようにも見える。

だが、なにより目に付くのはその背にあるもの　　白く輝く一対の翼だろう。

その姿に思い至る言葉はたった一つだ。

「天使……!?!」

教会などで描かれている空想の存在ではなく、女性は実際にこの世界・“ルミナシア”に存在する希少種族・“天使”だった。

それに、天使の背にあった赤い魔法陣。さっきの炎の塊はこの天使が放った“魔術”なのだろう。

だが、なぜ天使がこちらを狙う？ それなりに長いこと旅をしているが、天使を見るのはこれが初めてだ。当然、恨みを買った覚えなどない。

「……対象の生存を確認。続けて攻撃を開始する」

軽く混乱するこちらをよそに、天使はその冷たい視線をこちらに  
より正確に言うなら、おれの腕の中にいた女の子へ向ける。

……狙いはおれじゃなくて、こいつか……!?

そう認識するや、天使は背中の翼を広げて向かってくる。

冷たい視線は女の子から外さず、まっすぐ飛んでくる天使は右の剣  
を振りかぶる。

全身に襲う<sup>プレッシャー</sup>圧力。それらを見殺して、おれは女の子を後ろに突き飛  
ばし、天使と女の子の間に立つ。

そんなおれを障害と判断したのか、天使は視線をおれに向けて、振  
りかぶった大剣を右袈裟に振り落とした

これが、始まりだった。

ハチャメチャな朝を迎えて、その果てに偶然出会った記憶のない少女。

そんな少女を狙う天使との邂逅。

そんな、偶然に偶然が重なった今が、これから起きる様々な出来事の全ての始まりだった。

紡がれることになった物語。

おれがその役者の一人となったと言っことをおれ自身、この時はまだ知らないでいたんだ

## 偶然の出会い／始まり（後書き）

これが一応、一話目の立ち位置に入ります。

やっぱり人と人を話し合わせるのが苦手と言いますか……。もしこれを読んでくれて面白いと思ってくれたら幸いです。

では、あとがきはこれにて。

余談：これ、あとがきと言っか、ぼやきに近いような……？

## 逃走する二人／お人好し（前書き）

しまった。書くのが思った以上に長引いてしまった……！

初めてここに来た人は初めまして。

もし、この小説を楽しみにしてくれる方、お待たせしました。

これが二話目となります。

逃走する二人／お人好し

……

……

…

「それにしても、アキトさん遅いですね……」

時間は少し遡る。

場面は“シフノ湧泉洞”と呼ばれる洞窟の入り口。役者はその前に立っていた二人組だ。

その内の一人、白い法衣を纏い、腰まで届く金糸のような髪と優しげな雰囲気特徴的な女性が心配そうに呟いた。

どこか不安げな表情で、とある旅人の少年の名を口に出し、洞窟に隣接する森を見つめる。

鬱蒼としてる森からは、待ち人であるその少年が来る気配は未だにない。

「ミント、待ち合わせの場所は確かにここなんだよね？」

白い法衣の女性……ミント・アドネードの隣にいた青年が、目の前の森を見つつもミントに尋ねる。

青年は鋼で鍛えられた軽鎧を身に纏い、腰には一振りの長剣を、背には赤いマント、そしてマントと同色の赤い鉢巻を付けている、

その佇まいはゆったりとしているように見え、有事の際には即座に剣が抜かれるぐらいの緊張はしており、隙が見当たらない。

「そのはずですよ、クレスさん。アンジュさんにも確認しましたし、アキトさんのほうも手紙の返事が来ましたから、場所は分かっているはずなのですが……」

「もしかしたら、何かトラブルに巻き込まれたとか？」

「それはないはずですよ……とは言いきれないんですけどね。アキトさ



んの場合は特に」

「……へ？」

半ば冗談のつもりだったのか、青年が少々驚きの表情でミントに振り返る。

それはそつだ。目の前にある森は薄暗いとは言え、コレといった危険性がなく、基本的に住んでる魔物もウルフぐらいなものなのだから。

ウルフは単体ではあまり力もないうえに、基本的に単独行動を取る魔物ゆえに危険性も少ない。青年もそう見ているのだろう。

しかし、稀に最大で四匹ほど襲いかかって来ることがあり、その時は非常に厄介なチームワークを発揮するので油断は出来ない。十匹以上だと逃げる方が懸命である。

……しかし、件の少年は縄張りで野宿したことで、十数匹以上のウルフの群れそのものに追われていたのだが。                      当然、この二人には知る由もない。

ただ、ミントは困ったように頬に手を添え、青年                      クレス・アルベインへと説明を始める。

「えーとですね、アキトさんは昔からこう、トラブルに巻き込まれやすい体質でした。その上、本人もそのトラブルに進んでいく傾向

があるんですよ」

「え、いやミント、それは本当なのかい？」

クレスの疑問はもつともだろう。

真つ当な精神の持ち主なら、自ら進んで厄介事に関わるなどしないだろうし、考えもしないはずだ。

だが、そんなクレスに対してミントは更に苦笑しながら頷く。

クレスは思わず首を傾げた。

その苦笑が、未だに姿の見せない少年だけではなく、目の前の自分にも向けられてるのに気がついてしまったからだ。

それを問うより先に、ミントが口を開く。

「アキトさんはクレスさんと同じなんですよ。」

困ってるヒトを放っておけなくて、自分から飛び込んで行く  
ちやう優しいヒトなんです」

いつの間にか、ミントの表情は苦笑ではなかった。

どこか懐かしそうに、どこか嬉しそうに、それでいてクレスのよく  
知っている、優しく柔らかい彼女らしい笑みへと変化していた。

それで、クレスもなんとなくだが理解した。自分も困ってるヒトは放っておけない性質だと分かっていたからだろう。

そんな人物が、もし自分の周りでトラブルが起きて誰かが困っているのを見たとしたら、どんな行動を取るのかなんて……想像は難しくない。

「ただ、本人それを認めるのが悔しいらしくて、口ではどうでもいい風に装うんです。

でも、やっぱり最後には困ってるヒトの為に行動してて……なんだか、その根の部分にある優しさがクレスさんに似てて、今でもちゃんと思い出せます」

「そっか……って、僕はそんな大層なことはしてないと思うけどなあ」

腕を組み目を瞑り、「むむ」と唸るクレスを見て、ミントの笑みは更に深くなる。

《いえ、クレスさんもすごく優しいですよ？》

心に浮かんだ言葉を出さないでいたのはミントなりの優しさか。

紅潮した頬にクレスが気づかないのは仕様らしい。でも甘さを感じるのはいったい何故だ？

……なに、この惚気？ 非リア充へのあてつけかよ、ケツッ！！

閑話休題、閑話休題。

なにか、入ってはならない怨念が見えたが無視するべきだ。なかつたことにしておこう。

悪霊及び煩惱退散、退散。通りすがりで暇人な作者のひがみなど、今は全く関係ないのだ。

「……って、ごめんなさい。なんだか昔話になっちゃいましたね」

「いや、ミントの言いたいことは分かったよ。

そのアキト君が、そう言ったトラブルにまた巻き込まれてるんじゃないか。ってことだろう？」

クレスの言葉にミントは静かに頷いた。

確かに……そんなに何度も何度もトラブルに巻き込まれる人物が近くにいたなら、周りが心配してしまう理由も分かる。



来てる可能性を抜いて話をしてなかったかな？」

クレスが視線をミントから背後にあった洞窟の方へ向けながら呟くと、ミントが顔を若干青くしながら頷く。

「じゃあ、もしかしてアキトさんはまた……！」

「その“また”と言う所に、なんだかすごく不安と疑問を感じるんだけど？」

でも、あからさまなタイミングだったし、……確かめた方がいいかもしれないな」

言うやいなや、二人はもう一度顔を見合わせる。

そして、お互いに阿吽の呼吸で頷くと、迷いなく洞窟の中へと駆け出した。

そして、舞台と役者は再び時間と共に元の場面へと戻り行く

…

…

…

冷たい視線は女の子から外さず、まっすぐ飛んでくる天使は右の剣を振りかぶる。

全身に襲う圧力。プレッシャー それらを見殺して、おれは女の子を後ろに突き飛ばし、天使と女の子の間に立つ。

そんなおれを障害と判断したのか、天使は視線をおれに向けて、振りかぶった大剣を右袈裟に振り落とした。

「っ、らあッ！」

当然の如く斬られるつもりなんてないおれは、向かって来る歪な形の大剣にタイミングを合わせて、気合いと共に右の回し蹴りを叩き込む。

ガゴオツ！！　と言う鈍い音が響き、大剣の軌道が逸れる。因みに、足には脛当てを着けてるので、おれにはダメージがない。

おれはそのまま動きを止めずに、回し蹴りに使った右足を今度は軸にして、左の後ろ回し蹴りを天使へと繰り出す。

しかし、天使は左の盾を使ってそれを受け止め、そこでお互いの動きが止まった。

「お前、何者だ。なんで、いきなり斬りかかってきた……！？」

左足を受け止められながら、おれは自分でも分かるくらいにドスを効かせた声で、目の前の天使に問い掛ける。

しかし、天使はなにも答えようとしない。機械のように冷めた視線でおれを……いや、

その視線の行き先は正確に言うとおれじゃない。さっき後ろに突き飛ばした、記憶のない女の子に向けられている。

「……一応聞いとくけどさ、この無作法な天使はお前の知り合いだったりするか？」

視線を天使に向けたまま、今度は女の子に問いかける。



その問いかけに、離れた位置にいた女の子は、こっちに聞こえるぐらいに首をブンブンと振って否定した。

「わ、分からないよ……だってボク、ホントになにも思い出せないんだから……！」

「だよ、な。お前、自分で「なにも分からない」って言ってたし」

予想通りの反応に短く息を吐く。

しかし、それだと天使がなんで女の子を狙うのか、本気で分んねえな。

……いや、考えても分かんねえことは今はいいか。もう、こっちは朝っぱらからトラブル続きで既に容量限界なんだし。

「……逃げた方がいいかな？」

ぼつりと向こうに聴こえないように呟く。

今までのこと、今の状況、その全てを鑑みてそう判断する。

取りあえず戦うにしたって、あの天使が女の子を狙っている以上、一緒にいる場で戦闘するのは、あの子の方が危険になる。

だからおれは、まず受け止められていた左足を戻し、体を独楽のよ

うに時計回りに一回転させてから再び左足で正面への回し蹴りを天使の盾に叩き込んだ。

勢いをつけた一撃は、天使の体を盾ごとぶつ飛ばす。天使はぶつ飛ばされながらも翼を使い、空中で体勢を整えようとする間に、おれはさつき突き飛ばした女の子のもとへ駆け出す。

「取りあえず逃げるぞ！ ほら、急いで立て立て！！ すたんどあつぷ、すたんどあーつぷ！」

「突き飛ばした本人のセリフじゃないよねそれっ！？  
と言うか、なんか腰が抜けて……た、立てないんだけど……！」

「はあ！？ お前、この状況でそれはないだろっ！？  
……ああクソ、仕方ねえ！！」

「わ、わわっ!?!」

なんかツツコミを入れてから、この状況だと結構ヤバいことを告白した女の子を抱え上げる。

しかも、さつきもやったお姫様抱っこで……実はさつきも密かに思ってたんだが、これはやる方も大概恥ずかしいぞ!?!

でも今はそんなことを考えてる暇はない。顔に熱が灯るのを無視して駆け出す。

目指すのは風が吹いてくる方向

外に続いていると思われる方向

だ。そこには、人がちょうど入れるほどの穴があり、道もそこに続いていた。

「…………！」

走りながらふと背後を見ると、空中で体勢を整えた天使がこちらの意図に気づいたのか、その表情を僅かに歪ませていた。

しかし、天使は一瞬で元の無表情に戻ると、自分の周囲に赤い魔法陣を展開。

しかしその魔法陣は一瞬で背後に移動し、そして弾け…………え？

「 “スパイラルフレア” 」

告げるやいなや、天使の真正面に新しい魔法陣が出現し、そこから螺旋を伴った巨大な炎が生成されて…………、ちよつと待て！

コイツ今、詠唱無しで…………しかも上級魔術を発動しやがった！？

そんな、あまりに非常識な光景に驚愕していると、炎がおれ達に目掛けて向かってきた。驚く暇もねえのかよ…………！

「チツ…………掴まってる！」

舌打ちしながら女の子にそう告げると、状況を察した女の子が首に抱きつく。……若干、首が締まって息苦しくなったが、ツッコミはこの場を切り抜けてからしよう。

迫ってくる炎の熱気を感じつつ、踏み出した左足で、叩き込むように地面を蹴り、駆けると言うより前に跳ぶような動きで一気に加速した。

それで炎の軌道から逃れられたらしい。背後で炎が地面にぶつかり爆発したのを感じながら、おれは達二人はその場を後にした

十 十 十

背中の白く光る翼で宙に浮きながら、天使は自分の放った魔術が穿った跡を見ていた。

既に抹殺対象の少女も、対象と一緒にいた不確定要素イレギュラーの少年も既に見えない。爆発した魔術が発生させた黒煙に紛れて逃げおおせた。

「……………」

天使は機械のような冷たい眼差しで、自らの失態の証拠を見つめながら思考する。

当たるはずだった魔術は、自らが狙っていた少女を抱えた少年が、突如として速度を増したことで避けられた。そのうえ、最初の攻撃を防ぎ、あまつさえこちらに一撃を入れて、対象を逃す要因にもなった。

それらのことを踏まえ、天使は自らの少年の立ち位置を決める。

「イレギュラーを、対象の抹殺の障害と認識。

優先順位を変更。

任務遂行の為、イレギュラーの排除を最優先とする」

認識を改めた天使は背の翼を大きく広げ、空を翔る。

自らに与えられた役割を、果たす為に。

「ぜえ、ぜえ、ホン、ト……、厄日に、したって、限、度、を、  
…ぜえ、考え、ぜえ、やがれ、つての……！」

天使の魔術が引き起こした黒煙に紛れ、風が吹いて来た方へ逃げた  
おれ達は、それなりにある程度走ったところで、息を整えていた。

と言っても女の子はおれが抱えていた為、息を整えているのは実質  
おれだけだ。

その際に不満をぶちまけてるのはぜひとも許してほしい。

いや、マジで厄日の限度は今すぐ速攻で考えるべきだと思う。そう、  
ホントに光よりも早く　だから出来るかバカヤロウ。

「……ごめん、ボクが動けなかったから、キミに迷惑かけた」

そっぴや、びしょ濡れだった服もいつの間にか乾き始めてんなー。  
と思っていると、若干泣きそうになってる件の女の子がそう言葉に  
した。

女の子は呼吸を整えるおれの隣で俯いている。

「気にしちゃいねえよ。大体、突き飛ばしたのおれだろうが」

「ちがうよ。ボクが動けなかったのはキミの……アキトのせいじゃないよ」

あらかた息も戻ってきたおれはそう返すが、女の子はフルフルと首を横に振りながら否定した。

「……怖かったのか？」

「……、……ん」

その問いに、女の子は一度震えてから、遅れて頷いた。

……最初にケンカしてた時も思ったが、コイツ、少し自分を責めすぎじゃねえのか？

思わず溜め息を吐きながらも、おれは更に言葉を重ねる。

「なら、余計に気にしねえよ。そりゃ、いきなり命狙われたら誰だってビビる。おれも今朝、ウルフに食われそうになった時は、かつてないほどビビったしな。

……自分のことが分からなくて不安な時なら、なおさらだ」

言いながら立ち上がる。追われる立場にいる以上、あんまり長いこ

と同じどころにいるのは危険だろう。

天使が来る前に、さっさと次へ移動すべきだ。

「……ん。あ、アキト」

言うてから、屈伸などで足の調子確かめていたおれに、女の子が話しかけてくる。

「なんだよ、謝罪とかなら受け付けねえぞ。お前、ちょっと自分を責めすぎだしな」

その言葉に、女の子は静かに否定の意として横に首を振った。

「んーん、違うの。ただね、ありがと。って、言いたくて」

「……バーカ。礼を言うとしたら、今の状況をどうにかしてからだろっ」

女の子が僅かに微笑みながら言った言葉に、少しむず痒くなりながらも返事した後、おれ達は動き出した。



十 十 十

シフノ湧泉洞はところどころが水に浸かっている場所が多いが、歩ける場所はちゃんと存在する。

海にも繋がっているのか、仄かに潮の香りを感じつつも、水の流れの中に出来た岩の道を、おれは駆け足気味に進んでいく。

「あ、あのアキト、ボク、歩けるから平気だよ？」

そう心配するような響きで言うのは背中に背負った女の子だ。……ああ、背負ってんだよ。いわゆる“おんぶ”だ。おぶさってる、とも言っ。

なぜこんなことになってるかの理由は勿論ある。背中にいるので視線を向けられないと分かりつつも、気分的にはジト目で口を開く。

「……あのな。いくらなんでも靴を履いてないバカを走らせる訳にはいかないだろーが、このバカ」

「あっ」

そう、今まで一切合切気づかなかったが、何故かコイツは靴を履いていなかった。

偶然気がついたから良かったものを。つか、コイツは地上の森も裸足で歩いていたのか？

しかし、理由を問おうにも記憶喪失だから分からない。洞窟って言う天井から足場まで岩、岩、岩な場所を流石に走らせる訳にはいかない。結果、今の状況である。

こんなところが、きっと周りからお人好しって言われる要因なんだろうか？ もうちょい自分本位に生きれたら、どれだけ楽か。

……いや、ダメか。なんか、それはそれですごく嫌な気がする。じやあ半々くらいか？ もしくは足して二割にして……関係ないことに思考を回すなバカヤロウ。

若干思考が変な方向になりかけたところで無理矢理戻す。……なんか、最近こんなのが多いと思うのは気のせいか？

「で、でも、ボク重くない？ さっきも、それですごく疲れてたみたいだったし」

思考が戻ったところで再び背後から再び声がかかってきた。

状況が状況だし、あまり声出すのは良くないが、これ以上、コイツを不安にさせたくない為に会話は必要だろう。……そこ、お人好しと言った奴、今すぐ面ア貸せ……！

兎にも角にも、おれは足を止めずに「そうだな」と前置きを付けながら答える。

「重くはねえな。さっきのアレは全速力で走ったからだし。

……つか、寧ろ軽い。軽くて逆に心配になるレベルだ」

「なら、良いんだけど……」

「良くねえよ。お前、この一件が終わったら、ちゃんと飯を食えよな。」

なんなら、好みのもん作ってやつからよ」

料理は意外に得意分野だ。おれの武術の師匠であり、居候仲間だった、ある人物に師事していたからな。

ちょっと懐かしいことを思い出したせいか、その人物がもしこの女の子を見たらどんな反応をするかを考えてしまう。

……間違いなく、その日の夕食は脂肪分の多い食材で構成されたメ  
ガ盛りの料理になるな。と、半ば確信してしまうのは仕様か？

いや、個性インパクトの強さだろうな、確実に。……断言できるのがなんか悲しいぞ。

閑話休題。

そんなこんなで暫く進み続ける。

駆け足気味に、天然の岩の橋を渡り終えたところで、今までとは打って変わって狭い場所に出た。

「あれ、なに……?」

背中の女の子が不思議そうに呟いた。

そこには“光”があった。

狭い空間の中心、白い円陣の中央に幾重もの円を乱雑に重ねたような“光”が浮かんでいた。

それは、おれにとっては見慣れたものだ。

「“光の幾何学場”、だな」

「光の……キカガク、バ?」

「言っちゃえば、この場に訪れた奴の姿や情報を記録して、後で来

た奴に情報を見せるヘンテコで不思議なモノ……かな」

「？ なんだかはつきりしないんだね」

その言葉に、おれは苦笑した。

ああ、確かにはつきりしてないんだから仕方ない。まあ、これには歴とした理由があるが。

「仕方ねえよ。この光の幾何学場は今まで誰にも解明されたことがない、不思議そのものな代物なんだからよ」

「そうなの？」

「ああ。せいぜい、さっき言った記録能力と、コレの近くには魔物が近づかない結界能力。

後は世界各地にどこからともなく現れるってことぐらいしか分かってねえな」

そう、この光の幾何学場はマジでどこにでも現れる。ここのような洞窟や森に平原などは当然。更に人里、民家の中、果ては城の中にも現れたと旅の中で聞いたことがある。

その時の感想が「意味分かんねえ」だったのは言うまでもない。いや、だってマジで意味分かんねえし。

光の幾何学場は記録能力はともかく、魔物を寄せ付けない効果に主

に重点が置かれているが、……元々、魔物のいなさそうな民家や城  
ん中に現れたってどうしろと？ 使い道が分かんねえって。

そんな風に軽く説明すると、背中の女の子は感心したのか、理解出  
来ないからなのか、「ふわぁ……」と言う溜め息を漏らす。

その間におれは幾何学場に近づき、浮いていた光の中心に触れた。

光が一瞬だけ強い光を発すると、記録された情報が頭の中に入り込  
みんで来た。

「アキト、なにしてるの？」

「コイツに収められた記録を見てんだよ。なんか有用な情報がねえ  
かな……って、なんだこの全身にヘンテコな刺青入れた奴は？」

「え、え？ ボクにはなにも見えないけど……」

「光に触ってる奴しか見えねえんだよ、コレは。……気になるなら  
見てみるか？」

「んっ」

女の子は興味津々と言った感じで頷いて、背中からすぐに手を伸ば  
して光に触れ 「みゃっ！」と小さく悲鳴を挙げてからすぐに  
離れた。……しまった、説明を一つ忘れてた。

「あー、悪い。言い忘れてたけど、コレの独特の感覚は慣れてないとキツイぞ」

「そ、そう言うことは、もっと、早く言ってえ……！」

「みゃー……」と小動物チックな呻き声を出して、軽く目を回している女の子に苦笑しつつ、おれは更に記録を頭の中に浮かび上がらしていく。

頭の中に再現されたのは、二人の男女の姿で、一人はさっき言った全身に刺青した奴だ。

それは男性で、刺青以外にも首と両手両足に鳴子が何故か付けていて……明らかに不審者だ。

しかしもう一人、連れの女性の方は普通だった。普通に美人だったが、刺青鳴子男と一緒に見ると、その普通さが喰われてしまう。

思わず首を傾げてしまうような二人組は、この先に進んでいくが、何故か直ぐに戻ってきた。

「……待て、こっちは出口じゃねえのか？」

念の為、他の来訪者の記録も見るが、結果は全て同じだった。皆が皆、全て引き戻している。

慌てて光の幾何学場から手を離し、自らの目で確認する為、その先に進むと、

「！ わぁ……！！」

背中の女の子が感嘆の溜め息を漏らす。かく言うおれもだ。

進んだその先、そこには一本の大樹があった。

浅瀬の、水の浸かるところで根を生やし、その枝には色とりどりの鮮やかな花を咲かしている。

花はやがて地面に落ち、川に流れていくが……ああ、間違いねえ。

「ユルングの樹……！！」

「アキト、この川に落ちてく花って……さっきボクたちがいたところに流れてた物、だよな？」

ああ。と頷き、視線を樹から周りに向ける。こんな時でなければ、のんびりとこの不思議な樹を眺めていただろうが、今は樹に見とれている暇はない。

しかし、辺りを見渡してから気づく。



「マズい……！　ここからじゃホントに外へ出られねえ！」

川の流れに乗っていけば出れるかも知れないが、そもそもヒトが行ける場所ではないだろう。

更に空を飛べる天使には見つければ、その時はホントに為すすべがない。リスクが高すぎる。

急いで引き返す為に身を翻す。

光の幾何学場を通り、岩の橋の方へ戻ろうとして　動きを止めた。

岩の橋の先、更に向こう側の通路に繋がってる穴から、白く光る翼を広げた天使が見えたからだ。

「っ……！」

背中の子が、思わず出しそうになった声を必死で抑える。

幸いにも天使は周りを見回していた為に、こちらにはまだ気づいてないし、すぐに見えなくなったので、こちらに来るのも暫く後だろう。

おれは声を抑えた女の子を背負いながら、ユルングの樹がある場ま

で引き返すと、おれは一旦、背中におぶさっていた女の子を下ろした。

茶色の外套に身を包む彼女は、その紅い瞳を不安と恐怖で揺らしている。

「……いずれ、ここに来るのも時間の問題、か」

眩きながら、思考を開始する。時間がないから急いで、しかし焦らずにだ。

向こうがまだ気づかないとしても、追い詰められたのは拭いようのない事実だ。

でも、だからと言ってまだ終わった訳じゃない。なんとかしてこの場を切り抜くべきだろう。

しかし、流石に二度も無事に逃げれるとは思わない。最悪、戦闘も覚悟している。

だが、戦うにしても、この子を巻き込むのはマズいと思う。アイツはこの子を殺すことを第一としていたのは、一度相対した時にもう分かっている。

そんな相手に少しでも隙を見せれば、たちまち矛先はこの子の方に向くだろう。今のところ、あの子には戦闘能力がないのだから、そうなったら終わりだ。

どうにかして、女の子と天使を引き離すしかない……なら、

「アキト」

ふと、おれがある一つの策を思いつくと同時、隣にいた女の子が声をかけてきた。

「なんだよ」

「あのね、あの翼のヒトはボクを狙ってるんだよね」

女の子は紅い瞳を不安の色に染め、けれどまっすぐにおれを見ながら言葉を発していく。

……その様子になんとなく。いや、本当はもう分かったが、女の子がこの先になにを言うのか察してしまったおれは、密かに溜め息を吐いた。

またか。コイツはまたなのか。

「だから、ボクが一人であるヒトの前に出れば、アキトは無事に  
ふみゃあっ!?!?」

ああ、うん。流石にキレた。

セリフの途中でまっこと真実に悪いが、無理矢理に止めてやる。

具体的に言えば、女の子の頬を両手で思いっきり引っ張って。餅のように、こっぴょんっとな伸ばしてだ。

「いひゃいつ、いひゃいから！ ひゃなひてひよ、あひとおー!？」

「いたいつ、いたいから！ 離してよ、アキトー!？」

訳すとこんなところか。

天使はまだ遠くにいると思うが、一応警戒しつつ、おれは女の子へと向けて“にっこり”と、天使（教会とかの方）にも勝る笑みを向ける。なんか頬が餅化したバカが若干引いたけど気にしない。

「却下だバカ。そしてお前のバカ過ぎるバカなバカ提案も全面的に却下だ、このオメガバカ」

「ば、ばひゃっふえ!?! ほひゅははひふえひひゃんふあへへ……

いひゃひゃひゃひゃっ!?!?」

「ば、バカつて!?!? ボクはマジメに考えて……いたたたっ!  
!?!?」

脳内で訳したセリフに、デコ当たりで“ブチッ”と言う音が聞こえた気がした。

きつと青筋でも浮かんただらう。なに、気にすることはない。

そのまま、もう一度“につこり”と0円スマイルを向ける。オメガバカの顔がなんか青ざめたが、当然の如く無視した。

それから、頬を伸ばす力を強くする。伸びる。もつと伸びやがれ。そう、某ゴム人間のように。

「ほお、マジメと言うか。あんなふざけた提案をマジメと言うのか、うむ、そうか。なら仕方ねえ。

ちよつと頭冷やそうか?」

「うみやあつ!?!?」

「うみやあつ!?!?」……あ、コレは訳の意味ねえな。

なんか楽しくなってきたから、もうちょい続けたかったが、流石に状況が状況なので自重して解放する。



滅にはーなーしーてーっ!」

ああ、確かにその通りだな。でもそれ以上にムカついてんだから仕方ねえだろっ!!

そしてアイアンクローは却下だ。お前はその自虐思考を少しでも反省しやが

「  
“ エクスプロード ”」

「 「つつっ!!?」 「」

響いた声に、とっさに女の子を普通に抱えて背後に跳ぶ。

瞬間、どこからともなく現れた炎の塊が地面に墜ち、勢い良く爆発した。

それは、最初にこの女の子が狙われた時と同じ光景だった。

迫り来る爆風になんとか耐え、前を見据えると……いた。

「天使……っ！」

白く輝く一對の翼。ツルハシのような大剣と先端に刃が付いた盾。……間違いなく、女の子を狙ったあの天使だった。

「……っ!？」

空気が一瞬で変わった。

同時に、女の子を抱える腕から直に震えが伝わって来るのを感じ取る。最初に焼き殺されそうになったことを思い出したらしい。

おれは安心させるように、女の子を抱える腕の力を強くした。

「あ……」

それで少しは恐怖も軽減されたのか、女の子の震えが徐々に治まっていった。

それを認識したおれは、小声で天使に聴こえないよう、静かに女の子に話し掛ける。



「…………頼みがある」

「た、頼み…………？」

ああ。と頷き、女の子を離してからその前に立つ。

天使はまだ動かない。観察するようにこちらを見て…………いや、ちょっと待て。

アイツの視線の行き先が、最初と違って女の子じゃなくて、おれに向いてる…………？

いや、今は気にしなくていいか。それならそれで寧ろ今は好都合だしな。

おれは前に立ちながらも、小声で告げる。

「今から、おれがアイツを引き付ける。だから、お前はここから出て」

「ッ、そんなのダメ…………！ アキトさっきと違うこと言って…………むぎゆう！？」

さっきの余熱がまだ残っていたのか、おれの話最後まで聞かずにまたヒートアップしかけたオメガバカを、デコに裏拳を入れること

で止める。

「話は最後まで聞けバカ。……お前にはここを出て、洞窟の入り口にいると思う二人組に助けを求めて来て欲しいんだ」

いいか？ と前置き、更に言葉を続ける。

「片方が白い格好をした金髪の女性だ。そのヒトとおれは知り合いなんだが……とにかく、それらしいヒトがいたらすぐに連れてきてくれ」

「で、でもアキトはそれまで一人だよ……！？」

「ああ、だからなるべく早く頼むわ。無論、死ぬ気なんてねえから安心しろよ」

言いながら振り向き、頭ごとその特徴的な銀と朱の髪を撫でる。

上手く笑えたらいいが。と思いつつも、女の子の頭から手を離し……背後に向かって蹴りを入れる。

その蹴りは、後ろを向いたおれに斬りかかろうとした天使の大剣にぶつかり、それを弾いた。

背後からの攻撃を予測してなかったのか、天使の表情が驚愕からなのか、また僅かに歪んだ。

「行けっ！」

言いながら、天使を抑える為に、左足を軸に右足で更に連続蹴りを繰り返す。

その間に女の子が走り行こうとするが、何故か入り口辺りで一旦止まった。

そして茶色の外套を翻すと、蹴りを放ち続けるおれに向かって叫んだ。

「…………約束！ あとで絶対に美味しいもの作って！！」

一瞬、キョトンとしてから苦笑が込み上げた。よりによってそれかよ。もつとマシな約束とかねえのか？

けど、それはさっき、おれが女の子に先に持ちかけた約束だ。

そして、約束は果たしてこそ約束と呼べると、おれは考えている。

なら、その約束も果たさないとダメだろう。なにより、おれ自身が許さない。

「ああ、なんならフルコースでも作ってやるよっ！！」

「……んっ!!」

思わず笑いながら、声を大にして返事を返す。もちろん了承。イエスだ。

女の子はそれに頷くと、駆け足でこの場を後にした。……裸足で駆け出したのが心配だが、ミントさんに出会えば大丈夫だろう。

裸足で岩の地面を駆ける足音が遠ざかる。

そして、この場には、おれと天使の二人だけとなった。

おれはバックステップで背後に跳ぶと、改めて天使と相對した。

「じゃあ、悪いけどよ。暫くおれに付き合ってもらおうぞ。

異論は聞かねえぜ?」

そんな軽口を叩きながら、おれは天使に向かって駆け出す。

対する天使も、翼を広げると大剣を構えて飛翔する。

ここに、おれと天使の戦いの火蓋が、切って落とされた

## 逃走する二人／お人好し（後書き）

やっぱりまだ文章構成が甘いと言うか……精進しなければならぬことが多いですね。

うし、頑張ろう。

あ、それと主人公のキャラ紹介を簡単ですがここに載せたいと思います。

### キャラ紹介1

アキト・セレーナ

この物語の主人公。不思議な髪を持つ記憶喪失の少女と出会うことで、物語が始まった。

青みがかつた黒のショートに、翠色の瞳が特徴。服装は詳しく書かれてないが、“現在”の服装は長い旅でかなり擦り切れている。

口は悪いが根っこはかなりお人好しな性格。だが思考は割とカオスな展開になりやすい（主人公補正）。

物語開始の初っ端から厄日と言う、運勢の悪さを持つ不幸なヒト。だいたいコイツの視点で物語は進む。

世界各地を旅する旅人なのだが、物語開始前になんやかんやあって、ある人物達と合流するためにシフノ湧泉洞に向かっていた。

身内とかの詳しい詳細はまた別に明かすはず。でも身内に関してはファミリネームで既にバレてると思う。

因みに職業は『軽業師』との事。当然のごとくオリジナル。  
蹴り技を主体に戦う。その実力は多分、次回で発揮されるはず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0617ba/>

---

- 共に生きて -

2012年1月11日06時55分発行